

# 流行のつぼ

古くから日本人の生活になじんできたろうそく。亀山市川崎町のろうそく製造業、アシベ工芸の「復興祈願ろうそく」が、注目を集めつつある。従業員三十人の町工場に訪れた転換点は、東日本大震災だった。(久野賢太郎)

「震災の翌日から、矢継ぎ早に非常用ろうそくの注文が集まった」。そう振り返るのは、同社の新庄哲二社長(六)だ。従来は寺社や葬祭業者など、業務用を中心にして、ろうそくや線香を製造していた同社だが、関東地方で

## アシベ工芸のろうそく

# 復興祈願 道筋照らす



高野山の寺などに置かれている復興祈願ろうそく(左)などの和ろうそく=いずれも亀山市川崎町のアシベ工芸で



急ピッチで生産される非常用ろうそく

計画停電が始まると、あ従業員と新庄社長に違和感だけが残った。新庄社長は、寺や神社が始まった。商品が売れることに着目し、ろうそくの表面に「大震災復興祈願」と印刷した。以前から取引のあった真言宗の総本山、高野山金剛峯寺(和歌山県)に持ち込むと、境内の献灯台前、非常用ろうそくの注文が全国から舞い込む中、が、小さな会社の良い所。新庄社長は胸を張る。非常用ろうそくの増産態勢は今も変わらないが、祈願ろうそくの生産も続ける。新庄社長は「葬式や仏壇のろうそくは、商品スピード開発した。社員はよく頑張つて、明かりや、子孫が暮らす家の目印という意味がある。復興祈願ろうそくには、日本の復興への道筋を照らしてほしい」という意味も込めた」と拳を握りしめた。